

Association between retinopathy and risk of dementia in a general Japanese population: the Hisayama Study

中村, 駿

<https://hdl.handle.net/2324/7329436>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (医学) , 課程博士
バージョン :
権利関係 : Creative Commons Attribution 4.0 International



(別紙様式2)

氏 名	中村 駿
論 文 名	Association between retinopathy and risk of dementia in a general Japanese population: the Hisayama Study (日本人地域高齢住民における網膜症と認知症発症との関連：久山町研究)
論文調査委員	主 査 九州大学 教授 松尾 龍 副 査 九州大学 教授 磯部 紀子 副 査 九州大学 教授 須藤 信行

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

網膜症の病態の一つである網膜微小血管異常は、認知症の神経変性過程を反映することが示唆されている。一方、網膜症と認知症発症リスクとの関連を検討した地域住民を対象とした縦断研究は少なく、一貫した見解が得られていない。そこで、日本人地域高齢住民において網膜症と認知症発症との関連を検討した。

対象は2007年の久山町健診を受診した60歳以上の男女のうち、眼底写真が得られた1,709名であり、2017年まで追跡した。網膜症は眼底写真からModified Airlie House Classificationに従って判定し、網膜所見別では網膜毛細血管瘤および網膜出血に区分した。認知症はDSM-ⅢRの基準で診断した。認知症の発症リスクの算出には、コックス比例ハザードモデルを用いた。年齢、性、学歴、高血圧、糖尿病、総コレステロール、body mass index、脳卒中既往歴、喫煙、飲酒、運動習慣を共変量として用いた。

結果、追跡期間中に374名が認知症を発症した。網膜症を有する群における認知症の粗発症率は、有しない群に比べ有意に高かった ($p=0.01$)。非網膜症群に対する網膜症群の認知症発症のハザード比 (多変量調整後) は、1.64 (95%信頼区間 1.19-2.25、 $p<0.01$) であった。網膜所見別の検討では、網膜毛細血管瘤を有する者では、有しない者比べ認知症発症リスクが有意に上昇した (ハザード比 1.94、95%信頼区間 1.37-2.74、 $p<0.01$)。

結論として、わが国の地域高齢住民において、網膜症を有するものは認知症発症リスクが上昇した。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士 (医学) の学位に値すると認める。

なお本論文は共著者多数であるが、予備調査の結果、申請者が主導的役割を果たしていることを確認した。